

令和6年度 かほく市立外日角小学校 学校評価計画最終報告書

※肯定の結果が前期より3%以上上がった(太字)下がった(二重線)

重点目標	取組内容	主担当	現状	評価の観点	達成度判断基準	判定基準	肯定的結果	達成度	結果の考察	今後の方針	学校関係者評価
1 確かな学力の育成	① 学習規律、基礎基本の定着・習熟を図る	学習指導部	教師や他の児童の話を最後まで聞こうとする姿勢の弱い児童が見られる。	【努力指標】話す人の方を見て最後まで話を聞いている。	A：よくあてはまる B：おおむねあてはまる C：どちらかといえばあてはまらない D：あてはまらない	A+Bが80%未満の場合、取組の検討・改善をする。	100% (教) 94.3% (児)	A	児童・教職員共に肯定的評価は高い。	「話す・聞くステップアップ表」を全校で活用することで、児童と教職員が目標を具体的に持ちながら授業ができるので、肯定的な評価につながっていると思われる。今後は、その表をより児童の実態に合うように見直して、更に児童ができたことを実感できるように取組を進める。	・聴く子、聴く力を育てることは本当に難しい。そんな中で達成度がA評価は素晴らしい。継続して取り組んでほしい。また、「しなければならないこと」「させられること」はできても、「自分でしないといけないからする」という力を本校児童には付けていかなければならぬと思う。 ・学習については、「ねらい」がはっきりしていると、児童の達成感や満足度も上がることになる。 ・前期よりA評価が下がった項目が大変多い。なかなか意欲等を持続できない児童もいるようであるが、自分を見つめることができたと考えることもできる。意欲の持続は大変難しいが、手立てを工夫して取り組んでほしい。 ・一人一台端末の活用が4年目に入った。個々のレベルの差が縮まるよう取り組んでほしいし、保管についても気を付けてほしい。
	② 授業力・指導力の向上★	学習指導部	子供主体、そして、本校の重点「子供が選択し、自己決定する場の設定」をめざした授業への取組がスタートしたばかりで、模索しながら進んでいる。	【成果指標】授業の中で自己決定する場を設けている。	A：週3回以上できている B：週2回以上できている C：週1回以上できている D：ほとんどできていない	A+Bが80%未満の場合、学年研やブロック研で取組を検討する。	92.0% (教)	A	教職員の肯定的評価は高い。	「ねらいを達成するための自己決定」について研究授業を通して学校全体で研究を進めてきた。自己決定は回数ではなく「ねらいを達成すること」に重点を置く必要がある。今後も、今年度の研究に積み重ねる形で「子供主体の授業」の実現に向けて、実践を積み重ねていく。	
	③ 学習場面に応じた1人1台端末の有効的な活用に努める	学習指導部	授業のねらいを達成するための、ICT端末・機器の積極的な活用はできてきたので、効果的な活用を推し進めていく。	【努力指標】クロムブックを使った効果的な活用を行っていきる。	A：よくあてはまる B：おおむねあてはまる C：どちらかといえばあてはまらない D：あてはまらない	A+Bが70%未満の場合、取組の検討・改善をする。	96.0% (教) 97.3% (児)	A	教師・児童共に肯定的評価は高い。	今後も、授業のねらいを達成するためにICT端末、機器の効果的な活用を積み重ね、教職員が効果的な使い方を身に付けられるように共通認識できるようにする。	
	④ 学校で読書する習慣を身に付ける	学習指導部	低学年は、図書館に楽しんでう姿が見られるが、高学年になると進んで読書をする児童が少なくなる傾向がある。	【成果指標】週に1回図書館を利用する児童が80%以上である。	A：80%以上の児童があてはまる B：70%以上の児童があてはまる C：60%以上の児童があてはまる D：50%以上の児童があてはまる	A+Bが70%未満の場合、取組の検討・改善をする。	82.0% (教) 75.6% (児)	B	図書館を利用する肯定的評価は80%を超えており、児童のA評価は約5%下がった。	前期同様、教師は、意識して読書時間を確保し、読書の習慣化を図る。また、月に一度は、担任が読書冊数の少ない児童へ声掛けしていく。	
2 豊かな心の育成	① 気持ちのよい挨拶、時と場に応じた言葉遣いができる	生徒指導部	玄関での朝のあいさつは少し元気になっているが、安全ボランティアや来校者へのあいさつを進んでできる児童が少ないと感じる。	【努力指標】自分から進んでいいあいさつをしている。	「自分から進んでいいあいさつをしていますか」に対して、AもしくはBと答えた児童・保護者が A：90%以上いる B：80%以上いる C：70%以上いる D：70%未満いる	A+Bが70%未満の場合、取組の検討・改善をする。	88.6% (児) 85.0% (保)	B	前期より保護者の肯定的評価は上がった。児童のA評価が約9%下がった。	昨年度同様、後期に肯定的評価が下がる傾向が見られる。縦割りグループでのあいさつ運動や、新聞取材などの取組を実施したが、成果には表れていない。あいさつを推進する後期企画委員会の意識の低さも課題であった。今後、企画委員会を中心に、新たな取組を考え、マンネリ化を防ぐ。	・Icheck調査において一人一人の児童が本音で回答できるような関係づくりが、学級の中でできているとよい。 ・不登校傾向の児童が「仲良しごループの活動が好きだし楽しい」と言うのを聞いて嬉しかった。縦割りグループ活動を今後も続けてほしい。
	② 発達支持的生徒指導を推進し、自己肯定感、自己有用感を高める★	生徒指導部	自己肯定感が低く、自分にはよいところがあると感じていない児童が多い。	【満足度指標】児童が自分にはよいところがあると感じている。	「自分にはよいところがあると思いますか」に対して、AもしくはBと答えた児童 A：90%以上いる B：85%以上いる C：70%以上いる D：70%未満いる	A+Bが70%未満の場合、取組の検討・改善をする。	82.6% (児)	B	児童のA評価は、前期より5%程度下がった。	昨年度同様、後期に肯定的評価が下がる傾向が見られる。教員が児童一人一人の良さを見つけ、授業や行事等で活躍する場を意図的に設けるようにする。また、役割を果たす機会や、いいねカードを用いた他者評価の機会を増やすことで、自己有用感を高め、自己肯定感の向上につなげる。	・自己否定する子ほど褒め所を見つけることは難しいが、周りの大人がハードルを下げて「その子の良さ」を見つけるよう心がけてほしい。
	③ 児童にとって「安心」「安全」な居場所づくり★	生徒指導部	学校が楽しくない(C,D)と感じている児童が約14.2%いる。	【満足度指標】児童が学校が楽しいと感じている。	「学校は楽しいですか（楽しいと言っています）」に対して、AもしくはBと答えた児童・保護者が A：90%以上いる B：85%以上いる C：70%以上いる D：70%未満いる	B以下の場合、取組の検討・改善をする。	86.9% (児) 89.8% (保)	B	児童のA評価は児童のA評価は、前期より約11%下がった。	2学期以降、不登校児童数が増加傾向にあり、全児童が「安心・安全」な居場所づくりという点で課題が見られる。今後、月1回のともだちアンケートに同項目を追加し、学校満足度が下がっている児童の早期発見に努める。また、年2回のIcheck（児童質問紙調査）を活用し、学級経営に生かす。	

重点目標	具体的な取組	主担当	現状	評価の観点	達成度判断基準	判定基準	肯定的結果	達成度	結果の考察	今後の方針	学校関係者評価
2 豊かな心の育成	④ 「考え、議論する道徳」を意識した授業改善の工夫	学習指導部	学校行事や体験活動等との関連を図ったり、道徳の教科書をもとに、いしかわ版道徳教材やG.Tを活用したりして、個々の児童が、思いやりの心を持ったり、夢や目標を持ったりするように、共通実践を蓄積する必要がある。また、規範意識の向上も必要である。	【成果指標】道徳授業の工夫をする。 ア：導入の工夫 イ：道徳の教科書、いしかわ版道徳教材やG.Tの活用 ウ：中心登間の意味 エ：道徳掲示の蓄積 オ：体験活動との連携	道徳の授業で A：3項目以上に取り組んだ B：2項目以上に取り組んだ C：1項目以上に取り組んだ D：取り組めなかつ	A+Bが70%未満の場合、授業のあり方について検討・改善をする。	100% (教)	A	教職員の肯定的評価は100%である。	・道で小学生男児が挨拶してくれて嬉しかった。本校の挨拶が少しずつ進歩していると感じる。ただ、挨拶は先手で行うことが大事だし、家庭でも挨拶を習慣化することが大事。親が挨拶する手本を見せていいかなといと身に付くものではないと思う。それでも、会釈をする児童が増えていることは喜ばしい。	
	⑤ いじめ・不登校の未然防止・早期発見・早期対応★	生徒指導部	「いじめは絶対にいけない」と思っていない児童が一定数いる。	【成果指標】児童が「いじめはどんな理由があってもいけない」と感じている。	「いじめはどんな理由があってもいけないことだと思いますか」に対して、Aと答えた児童が A：95%以上いる B：90%以上いる C：85%以上いる D：85%未満いる	B以下の場合、取組の検討・改善をする。	99.2% (児)	A	児童の肯定低評価は、前期同様高い。	・宇ノ気中校区の挨拶がとても良く、河北台中校区の挨拶と差がある点は気になるところである。 ・大人でも、してはいけないことを注意することは難しい。言いにくいことを人に伝える体験の積み重ねによって得体し、言える人に育てていくことが求められる。 ・「子ども110番の家」が活用されている例を聞き、子供達に周知が進んでいるようであつた。安全意識を育てるためにも、今後も周知してほしい。	
	⑥ 児童が主体的に活動できる場を設定すると共に、集団の中で協力する心や他を思いやる心を育てる	特別活動部	なかよしグループ活動には、楽しく参加しているが、協力し合ったり、助け合ったりする関係が十分にできているとは言えない。	【努力指標】なかよしグループ活動に自分から進んで活動に参加し、楽しむことができる。	A：よくあてはまる B：おおむねあてはまる C：どちらかといえばあてはまらない D：あてはまらない	A+Bが70%未満の場合、取組の検討・改善をする。	94.3% (児)	A	児童・教職員共に肯定的評価が90%を超えている。	今後も、継続して教師からの認める声かけの場や異学年間のいねかードを活用した認め合いの場を積極的に設け、協力したり思いやったりする価値に気付かせる。引き続き学校行事や委員会活動でも継続りで活動する企画を行い、集団で取り組む活動を通して、全体で学校をよくしようとする意識を高める。	
	⑦ 特別支援教育校内委員会の機能化★	生徒指導部	個別に支援を必要としている児童の割合が高い。	【努力指標】児童理解の会や学年会、終礼等で、児童の実態把握や問題の早期対応に努めている。また、必要に応じて外部機関とも連携している。	A：よくあてはまる B：おおむねあてはまる C：どちらかといえばあてはまらない D：あてはまらない	A+Bが80%未満の場合、取組の検討・改善をする。	100% (教)	A	教職員の肯定的評価は100%である。	・県PTA大会にて、福島県での事例(スクールバス導入後肥満児が増え、地域との交流も減ったため、スクールバスを廃止したという取組)を拝聴した。2年生活科におけるGTとの体験後、我が子も野菜に興味を持つようになった。これは学校CNが地域人材を発掘・活用しているからである。今後は、地域に根差したものを子供達に知ってもらうだけでなく、更に地域と連携して発信していくければよい。	
3 健康・安全教育の推進	① 「体力アップ1校1プラン」をもとに、全校で体力アップを図る「スポーツチャレンジ」の積極的な参加	特別活動部	休憩時間に体を動かしている児童が多いが、運動能力調査の結果に反映されるまでには至っていない。また、運動を好みない児童もある。	【成果指標】マラソンやなわとびチャレンジカード等に意欲的に取り組み、体力・運動能力の向上が見られる。	「進んで体を動かしていますか」に対して、AもしくはBと答えた児童が A：90%以上いる B：70%以上いる C：50%以上いる D：50%未満いる	A+Bが70%未満の場合、取組の検討・改善をする。	87.9% (児)	B	教職員の肯定的評価は高いが、児童の肯定的評価は5%程度前期より下がっている。	なわとびチャレンジカードを活用し、進んで運動する児童の姿が見られた。 児童の肯定的評価の低下が見られるため、今後も児童が進んで体を動かせることができる取組を行ない、運動能力と意欲の向上を目指す。	
	② 避難訓練実施を含め、危険予測能力、事故回避能力などを育成する	保健安全指導部	校内の廊下や登下校時の歩き方、災害発生時の避難の仕方についても不安が見られる。	【成果指標】安全に廊下や道路を歩くことができる。また、非常時において避難の仕方を覚え、真剣に訓練に取り組むことができる。	「廊下や道路を安全に歩いていますか」に対してAもしくはBと答えた児童、「子どもは道路を安全に歩いているか」に対してAもしくはBと答えた保護者が A：90%以上いる B：80%以上いる C：70%以上いる D：70%未満いる	児童保護者評価とともにA+Bが80%未満の場合、取組の検討・改善をする。	95.4% (児)	A	児童・保護者共に肯定的評価が90%を超えている。	児童がよく走る場所は、玄関前ホールと体育館への道であり、遊びに行くときに走りやすい。担任を中心に行きやすい場所・時間をとらえて指導することが必要である。また、保健委員会が効果的な取組を行っているので、児童同士で廊下を歩く声掛けができるようにする。	
4 信頼される学校づくり	① 学校CNと連携し、教科や活動のねらいに沿った外部人材の活用を進めることで、効率的に学習を行う	教務部	学校CNと連携し外部人材の活用し効率的に学習を行うことを継続していく。	【努力指標】学校CNと連携し、教科や活動のねらいに沿った外部人材の活用を進めること。	A：よくできた B：おおむねできた C：どちらかといえばできない D：できない	A+Bが80%未満の場合、取組の検討・改善をする。	100% (教)	A	肯定的評価は100%である。	長期休みを利用して、各学年の担任と学校CNで話し合い、計画的に実行してきたことで、ねらいに沿った効果的な学習となった。 児童につけたい力を明確にし、授業に臨むことができた。今後も学校CNとの連携を密にし、新規の外部人材の発掘にも取り組んでいく。	
	② 各種便りやホームページ等での情報発信の充実	情報担当	様子や取組を更新している学年と更新していない学年の差が大きい。	【成果指標】定期的にホームページを更新する。	A：毎週更新している B：隔週で更新している C：月1回で更新している D：一ヶ月以上更新していない	C以下の場合、取組の検討・改善をする。	82.0% (教)	B	肯定的評価は80%以上である。	ホームページの形式を変更し、更新状況が一目でわかるようにした。そのため、各学年で更新頻度に大きな差がないように意識をもつことへつながった。 今後も、定期的学年会の度に更新しているかどうかチェックしたり、情報担当から呼びかけたりする。	

重点目標	具体的な取組		主担当	現状	評価の観点	達成度判断基準	判定基準	肯定的結果	達成度	結果の考察	今後の方針	学校関係者評価
4 信 づ頼 くさ りれ る学 校	(3) 保護者への「報・連・相」	管理職	学校生活で気になることや児童同士でのトラブルなどを保護者へ丁寧に連絡している。 気気になることは必ず保護者へ連絡することを継続する。	【努力指標】児童の気になることに対して保護者への電話、面談、訪問など速やかな対応を行っている。	A: よくあてはまる B: おおむねあてはまる C: どちらかといえばあてはまらない D: あてはまらない	A+Bが90%未満の場合、取組の検討・改善をする。	教職員の肯定的評価は100%である。	100% (教)	A	学校生活で気になることや児童同士のトラブルなどを、早期発見・早期対応を心掛けている。保護者からの苦情電話も減少した。引き続き、生徒指導のさしすせそ(最悪を想定して、慎重に、素早く、誠実に、組織的に)に留意しながら組織的に対応していく。	・昨年度まで5年生が取り組んでいたアサギマダラの活動をしていないのは残念である。白尾海岸での活動や地図網、海岸線を見つめる望遠訓練など地域の特色を生かした取組をぜひ来年度は行ってほしい。 ・教員の不祥事が報道で取り上げられている。本校でもチェック体制を取り対応していく必要がある。	
5 教 職 員 の 人 材 育 成			昨年度までは、一人に業務が集中することもあったが、今年度より、業務を細分化し、できるだけ一人一役となるよう担当を割り振り、自覚をもって公務を遂行を心がけられるようにする。	【努力指標】自分の担当に見通しをもち、提案・運営を積極的に行う。	A: よくあてはまる B: おおむねあてはまる C: どちらかといえばあてはまらない D: あてはまらない	A+Bが90%未満の場合、取組の検討・改善をする。	教職員の肯定的評価は100%である。	100% (教)	A	前期同様、自分の業務に熱心に取り組む様子がうかがえる。業務の標準化については、教務が主任主事に声を掛け状況の把握に努めている。職員会議等への提案文書についても、担当に任せっきりにせず、分室内でよいものに練り上げる体制も大切にしたい。	・学校ホームページを見ていると、昔にはなかった様々な体験活動を子供達が行っている様子を見かける。大変羨ましい反面、先生方の負担が大きくなっていないか心配である。教員による不祥事や休職者の増加などのニュースもあり、教員志望者が減っていると聞く。先生方は、体調に気を付けて、せめて18時台に退校できるとよいと願っている。	
6 教 職 員 の 改 善 教 職 員 の 多 忙 化	(1) 教職員が担うべき業務に専念できる環境を確保 教材研究や学年会の時間を確保	管理職	超過勤務はやむをえないという意識から、ワークライフバランスや適正な勤務時間のさらなる意識向上が必要である。	【努力指標】週3回以上19時30分までに退校している。	A: よくあてはまる B: おおむねあてはまる C: どちらかといえばあてはまらない D: あてはまらない	A+Bが90%未満の場合、取組の検討・改善をする。	教職員の肯定的評価は100%である。	100% (教)	A	全職員からアンケートをとり、「自分が教師として成長できたきっかけ」等紹介したところ、授業改善や学級経営等の向上の気運が高まった。若プロリーダーがペテラン教員に依頼し、授業公開をしてもらったこともよい機会となった。引き続き、若手教員のニーズに合った研修を企画していく。	・ 2学期は、教務からの声掛けもあり、退校時刻や勤務時間を意識した職員が多くいた。引き続き、教育活動における取組内容や時間等について、必要に応じて見直しを行う。また、学校CN・教育業務支援員の活用により、勤務時間の削減を目指していく。	
超過勤務はやむをえないという意識から、ワークライフバランスや適正な勤務時間のさらなる意識向上が必要である。			【努力指標】週3回以上19時30分までに退校している。	A: よくあてはまる B: おおむねあてはまる C: どちらかといえばあてはまらない D: あてはまらない	A+Bが90%未満の場合、取組の検討・改善をする。	肯定的評価は、前一期に比べて3%程度上がっている。	92.0% (教)	A	2学期は、教務からの声掛けもあり、退校時刻や勤務時間を意識した職員が多くいた。引き続き、教育活動における取組内容や時間等について、必要に応じて見直しを行う。また、学校CN・教育業務支援員の活用により、勤務時間の削減を目指していく。	・ 2学期は、教務からの声掛けもあり、退校時刻や勤務時間を意識した職員が多くいた。引き続き、教育活動における取組内容や時間等について、必要に応じて見直しを行う。また、学校CN・教育業務支援員の活用により、勤務時間の削減を目指していく。		